MESSAGE

知識・知恵の継承

執行役員
流通システム事業本部副本部長
宮内康一

昨年末に親族が集う機会があった。おじ、おばはかなり少なくなって、主体はいとこたち。久しぶりにそろった。

子供のころ一緒に遊んだいとこたちも、それ相応の年齢に達している。孫のいるいとこも多く、その孫たちを見ていると数十年前の自分たちを見ている気分になる。幼児が母親にじゃれつく姿は、私たちのころと、また100年前も1000年前も、あまり変わりはあるまい。人間にはDNA（遺伝子）によってある種の行動のプログラムが内蔵されている。しかし、知識はすべてゼロから学び、蓄積していく。

彼らはこれからいろいろなことを経験し、失敗し、成功し、たくさんのことを学んでいくのだと、人間の知識形成の大変さを思い、感慨にふけった。

昨年イタリアに旅行し、同地の世界遺産を見て、知識の形成と継承についてさまざまなことを思った。

世界の七不思議のピサの斜塔は、そもそも地盤が軟らかい所に建てられたので、着工してまもなく塔体が不等沈下し、傾きだした。地盤に対する知識不足で当初の想定が狂ってしまったのだ。しかし、建造をあきらめなかった。設計を変更し、中断を繰り返しながら、着工から約200年後の1360年に完成させた。高さ55m、塔の全重量１万4453ｔ、基礎部分１m^2当たりの平均荷重は50.7ｔ。これだけの荷重があっても600年以上、斜塔は維持されている。途中の設計変更による対応が効を奏して、傾きはしたものの、鐘楼として立派に役目を果たしてきた。多くの人の知識・

当レポートに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。すべての内容は日本の著作権法および国際条約により保護されています。
Copyright©2007 Nomura Research Institute, Ltd. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

知恵・技術の積み重ねが塔を完成させ、維持してきたのだ。

欧州の石造建築物には、建造に長い年月をかけたものが多い。ミラノの大聖堂（ドゥオーモ）は、イタリア最大にして最高のゴシック建築で、その美しい外観には一目見て圧倒される。壮大にして繊細、刺繍のように見える白大理石の装飾、垂直に延びる135本の小尖塔。外壁には2245体の聖人の彫像。この建物は1386年に着工され、500年の歳月をかけて完成された。

現代でも似たようなことがある。スペインのバルセロナで建設中のサグラダ・ファミリアは、着工以来100年以上たった今も完成していない。設計・建築に携わったガウディでさえ、自分の生きているうちに完成するとは考えていなかった。

ひるがえって、日本人には100年以上たってもまだ建設を続けるということが理解しづらい。自分の生あるうちに完成した姿を見たいと思う。聖武天皇は天平17年（745年）、大仏建立を発願し、完成まで７年かかったが、壮大な大仏を自分の目で見ることができた。

しかし、欧州はスケールが違う。長い歳月にわたり、たくさんの人が知識・知恵・技術を継承して完成させている。イタリアには、13～15世紀の建物でも、今でも補修を加えながら使っているものがかなりある。「古くなったから建て替えよう」という文化ではなく、古いものを直して大切に使う文化のようだ。これは石の文化だからなのか。

日本は木の文化である。伊勢神宮では20年ごとに神殿を建て替える。そして、この建て替えによって宮大工の技術継承を可能にしている。一方イタリアでは、「修繕」を通して先人の知識・知恵を学び、技術を継承してきているのだろうか。

人間は学んで知識・知恵を増やす。しかし、一人の人間の命には限りがある。不要な知識・知恵は忘れ去られていいが、必要な知識・知恵は次の世代に継承されねばならない。人間とは、そうしていろいろなことを継承し、さらに積み上げていく存在なのだ。

知識・知恵の継承。それにはまず、経験と教育が重要な役割を果たす。

今年の元旦の新聞で、知識の継承について２つの記事が目についた。一つはトヨタ自動車の張富士夫会長の技術継承の話。人は教育で知識を得るが、その知識が本当の理解になるまでには繰り返しの訓練が必要だと強調されていた。もう一つは七代目市川染五郎の話。歌舞伎の稽古はまずはなぞってなぞって、なぞりつくす。そしてその先に何が生まれるのか。何かが生まれれば進化できると語っていた。

知識・知恵の継承には、繰り返しの訓練、学習が必要だ。人類は知識・知恵の継承によって文明を発展させてきたのである。

身近なところにも、この人類の法則は生かされねばならない。野村総合研究所はリサーチ、コンサルティング、システム構築などを業としてきた。ここにも知識・知恵・技術の継承が求められる。リサーチ力やコンサルティング力、システム構築力・運用力を、事業環境の変化や新技術の発展のなかで、いかに継承し発展させていくかが問われている。

（みやうちこういち）

当レポートに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。すべての内容は日本の著作権法および国際条約により保護されています。
Copyright©2007 Nomura Research Institute, Ltd. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.